

# 生成AIと知財戦略：『守り』から『攻め』へのパラダイムシフト

第23回日本知財学会年次学術研究発表会から得られた核心的洞察



# 結論：知財人材は「書類作成者」から「戦略立案者」へ進化する



2025年11月の日本知財学会で示された最も重要な潮流は、生成AIを巡る議論が、法哲学的な「守り」の段階を終え、実務活用を主軸とする「攻め」の戦略フェーズへ明確に移行したことである。

- AIはもはや単なる効率化ツールではなく、事業機会の探索や発明創出を支援する「共創パートナー」として認識されている。
- この変革は、知財専門家が定型業務から解放され、AIを駆使してより高次の戦略的タスクに集中する必要性を示唆している。本資料では、この構造変化の核心を詳解する。

# 議論の構造変化：守りの時代から、攻めの時代へ



## 従来の「守り」の議論

法哲学的・受動的論点

- AIは権利主体となりうるか？
- AI生成物の権利は誰に帰属するか？
- 既存の法制度でどう規制するか？



## 現在の「攻め」の議論

実践的・戦略的論点

- AIをいかに活用し、発明を創出するか？
- AIで業務プロセスをどう変革・効率化するか？
- AIの分析をどう経営戦略に接続するか？

# 学会で示された3つの主要な議論カテゴリー



## 1. 実務への応用・効率化

特許実務（発明創作、調査、明細書作成）の自動化と高度化。AIを「共創パートナー」として活用する最前線。



## 2. 法的課題

著作権、人格権（声・肖像）、フェアユースなど、既存の法制度との整合性。ツール導入に伴う新たなリスク。



## 3. 発明の主体性

AIが発明プロセスに介在する場合の「発明者」の定義と、米国出願など国際実務への影響。

# AIは「発明の共創パートナー」へ：戦略的意思決定の支援

R&D・知財部門は、生成AIを単なる事務処理ツールではなく、**新たな価値創出の源泉**として活用し始めている。



### 応用・用途発明の大量創出

基本発明から派生する「発明候補群」をAIに大量生成させ、R&D部門と知財部門の新たな協働ワークフローを構築。



### 新たな事業機会の探索

特許データ解析と生成AIを組み合わせ、未開拓の市場や技術領域を特定。



# 具体事例：AIが導く事業機会とビジネスモデル

## mRNA医薬の事業機会探索

一般発表 2D13

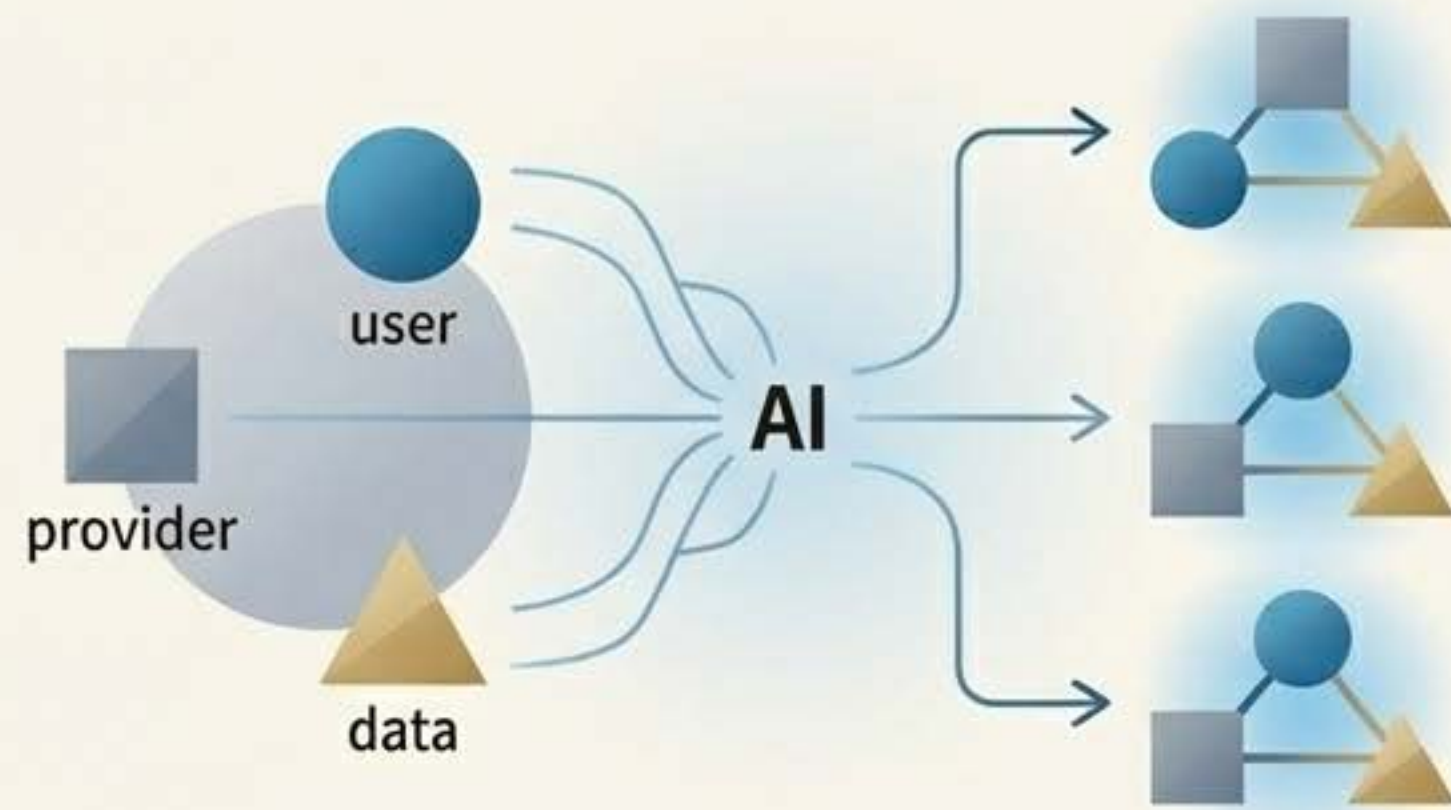
生成AIを活用し、膨大な特許データからmRNA医薬分野における治療標的や技術的ホワイトスペースを分析。具体的な「事業機会探索手法」として体系化。



## ビジネスモデルの発想支援

一般発表 2D18

仲介型プラットフォームのビジネス関連発明をAIが分析。成功パターンの抽出や新たな収益モデルの組み合わせを提案し、ビジネスモデルの発想を支援。

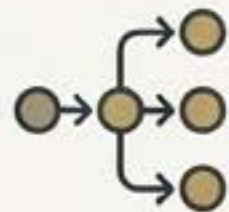


# 業務プロセスの自動化と高度化： 専門家を「戦略」に集中させる

従来、専門家が多大な時間を費やしてきた定型業務が、生成AIによって劇的に変革されつつある。これにより、専門家はゼロからの作成作業から解放され、出力結果の「検証」と「ブラッシュアップ」という高次のタスクに注力できる。



明細書・出願実務

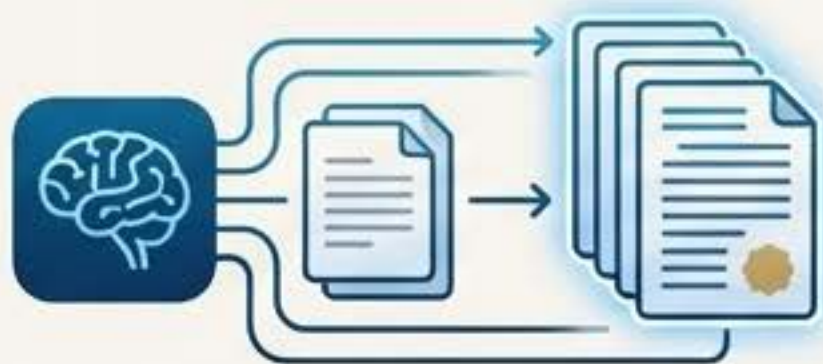


中間処理



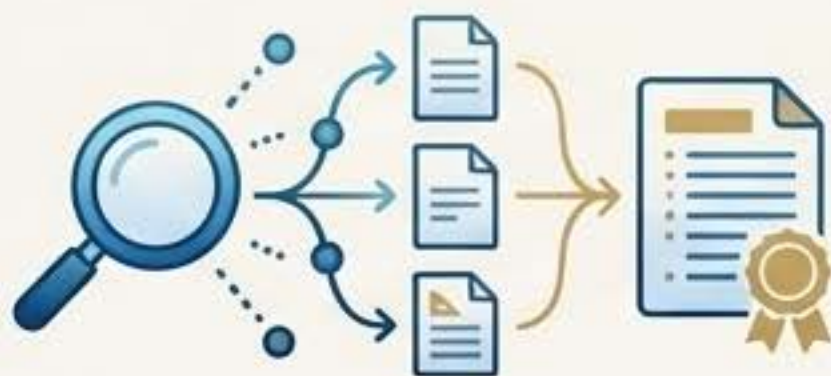
調査・分析

# 具体事例：調査・作成業務の劇的な効率化



## 明細書・クレーム作成

特許出願明細書の下案やクレームドラフティングをAIが瞬時に生成。日本弁理士会セッションでは、1年前のプロンプトとの比較で、出力品質の急速な進歩が実証された。



## 先行技術調査の高度化

LLMを用いて検索論理式や検索報告書を自動作成（一般発表 2D12）。特許データの階層的分類項目を自動生成し、高精度な自動分類を実現（一般発表 2D11）。



## 産学連携の探索

AIによる特許データの分類計算を通じ、技術的親和性の高い組織間の連携可能性を探索（一般発表 2D14）。

# ツール導入に伴う課題：品質保証と法的論点

生成AIを効果的かつ安全に活用するためには、技術的リスクの管理と、既存の法制度への適応が不可欠である。専門家の「検証者」としての役割が、ここで極めて重要になる。

## 品質保証とリスク管理

AI特有のハルシネーションやバイアスをいかに制御し、出力品質を担保するか。



## 法的・制度的課題

AI活用が、発明者認定や著作権など、既存の法制度にどのような新たな論点を突きつけるか。

# 実務上の課題：AIの「クセ」を見抜き、品質を保証する

## Challenge 1:

### ハルシネーションとバイアスの制御

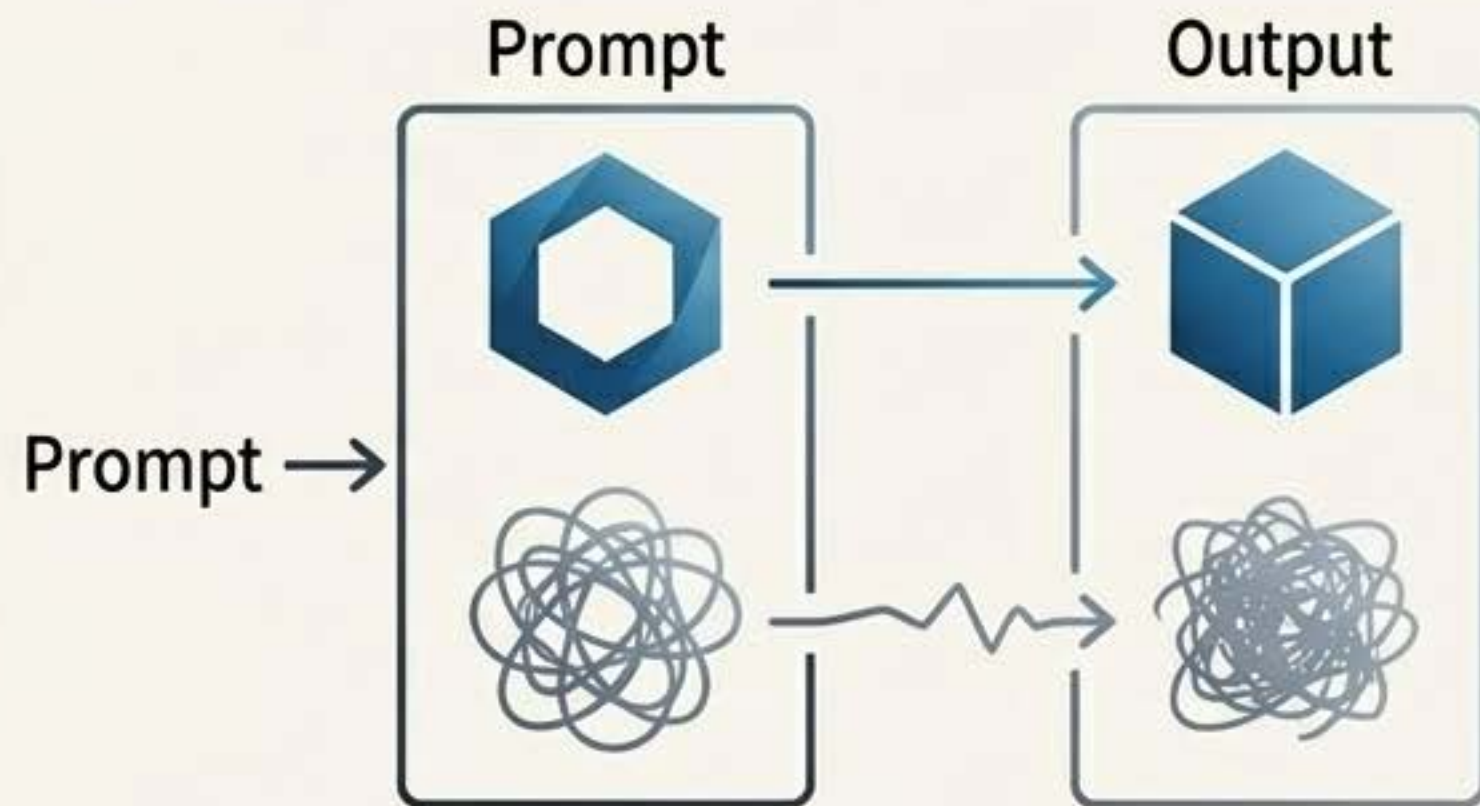
AIは「もっともらしい嘘」を生成する可能性がある。専門家によるファクトチェックと、出力の偏りを見抜く批判的視点が不可欠。品質保証（QA）プロセスの構築が急務。



## Challenge 2:

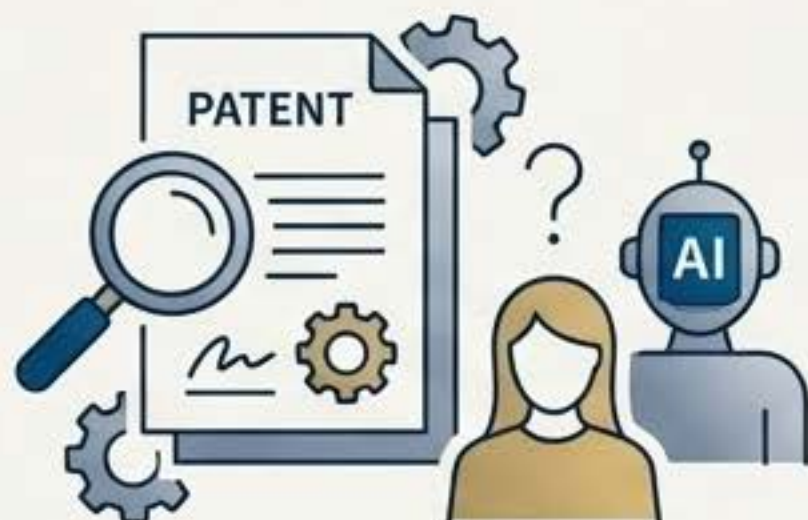
### プロンプトエンジニアリングの重要性

AIから質の高い出力を得るための「指示の技術」が、専門家の新たなスキルセットとして重視されている。出力の精度はプロンプトの質に大きく依存する。



# 主要な法的・制度的課題：グローバルな視点からの整理

## 米国出願と「発明者」認定



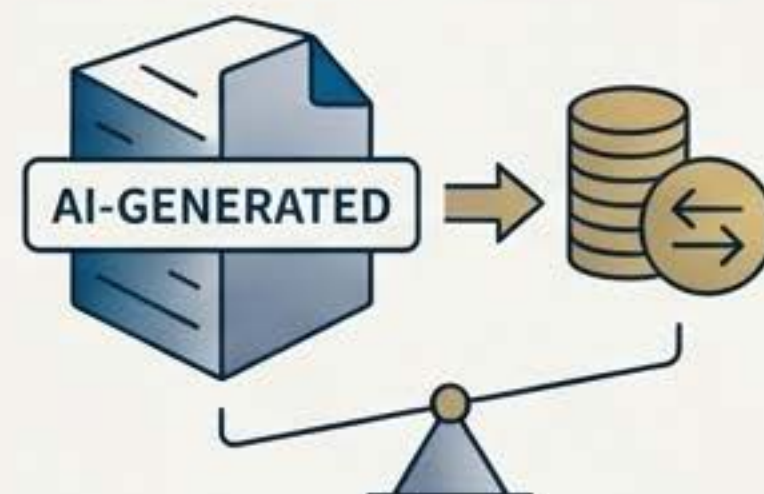
米国では「発明者」は自然人に限定。2024年USPTOガイダンスに基づき、AI利用時に自然人がどの程度「有意な貢献」をしたかを記録・立証する実務対応が必須。

## クリエイターの権利保護



AIによる音声や肖像の無断生成・利用がもたらす著作権、パブリシティ権、人格権の問題。学習データ利用がフェアユース（変容的利用）と認められるか（例：Anthropic事件）。

## 透明性と対価還元



AI生成物であることの表示義務化や、学習データに利用されたクリエイターへの正当な報酬還元に関する法政策的な提言（一般発表 1A6）。

# 未来の知財人材：AIを指揮する「戦略家」への役割変容

過去の役割：書類作成者



過去の役割：書類作成者

定型業務、情報収集、ドキュメント作成に多くの時間を費やす。



未来の役割：戦略立案者 & 検証者



未来の役割：戦略立案者 & 検証者

AIに定型作業を委任し、AIの出力を評価・検証し、そこから得られた洞察を事業戦略に接続する。

# 今後の専門家に不可欠となる3つの高次な能力



## 1. AI出力の検証能力

AIが生成した情報の正確性、妥当性、法的リスクを評価し、ハルシネーションを見抜く専門的知見。



## 2. 戦略の立案能力

AIが提示したデータや発明候補群を基に、知財ポートフォリオ、競合分析、事業戦略を策定する構想力。



## 3. 経営判断への接続能力

知財情報を分析・翻訳し、経営層が理解できる言葉で事業上のインサイトやリスクを提示するコミュニケーション能力。

# 生成AIが再定義する「知的創造サイクル」の新展開



この新しいサイクルを主導することが、未来の知財専門家の使命である。